

第1回 被災地の子どもの居場所づくり支援ネットワーク会議（R8.7.28）参加団体アンケート結果

所属 ※50音順※	氏名	メールアドレス	主な活動エリア	活動概要	活動地域におけるこどもたちの様子・ニーズとして考えていること	活動の強み
一般社団法人のとくまの	梢 正美	notokumano.stay@gmail.com	志賀町内 熊野地区・土田地区を中心とした活動エリア	令和6年能登半島地震での災害支援をきっかけに、避難所では「こども部屋★つちだ」を開設した。避難所閉鎖後には子育て当事者主体の「こそだちLabo」を立ち上げ、保護者同士のつながりを広げ、さらには地域住民や関係団体と連携し、「いつもの暮らしが、もしもの力になる」をコンセプトに、里山体験や食育、多世代交流を通じた子どもの居場所づくりに取り組んでいます。	能登半島地震を通して、発達特性のある子どもや不登校・行き渋りの子どもを含め、安心して過ごせる居場所や保護者が気軽に相談できる場の必要性を強く感じました。また、地域とのつながりが希薄になる中で、多世代との交流や自然体験を通じて「自分の居場所がある」と感じられる機会づくりが求められていると考えています。	地域住民、行政、学校、関係団体と連携し、地域資源を活かした里山体験や食育、多世代交流を実践しています。子育て当事者の声を起点に、「いつもの暮らしが、もしもの力になる」をコンセプトとした、地域ぐるみの子どもの居場所づくりを進めていることが強みです。
一般社団法人みらいのとしび	木村 聡		能登町	こどもの遊び場づくり（月1回ペース・主に小学生、未就学児が対象）	震災直後の年と比べると、精神的なダメージを表面的な会話からは感じにくくなっている	宮城県の遊び場づくりを主とする一般社団法人と連携し、プレーパーク・プレーワークの知見・専門性を持つ方々とともにビジョンを共有して活動を続けていること
一般社団法人能登官民連携復興センター	杉本 拓哉		能登エリア（3市3町が中心）	各種復興に取り組む活動に対する公募事業やクラファンの手数料支援を実施。人材不足に対応するためLINEやフーと連携したプロボノ活動の促進およびタイミーと連携したスポットワークの促進を実施など。	人口が減少することで失われる子どもたちの様々な活動の機会をどうやって支援していくかということが能登全体の課題であると考えている	信頼度が高い組織であるため、企業や行政との接点が多いことが強み。
NPO法人ROJE	潮 龍太	r.ushio@roje.or.jp	七尾市、金沢市、輪島市など	未就学～高校生を対象とした居場所の開設、中高生を対象とした進路支援、学習支援など。	夏は猛暑であったり、冬は悪天候であったりと天候に左右されない遊び場所が多くないことが課題の一つだと思う。また、地域にとっても若者が子どもたちと関わることにニーズがあると感じている。	県内の教育に関心のある大学生が多く所属していること、定期的に研修等を行っていることや専門家等との連携もしていること
NPO法人じっくらあと	小浦 明生	info@jikkurato.com	輪島市（輪島地区）	・10代を中心として子ども・若者が自由に過ごせる居場所「わじまティーンラボ」を運営。多くの子ども・若者の余暇の支援や困りごと・相談などの対応、地域資源との接続を行う。また、地域に子ども・若者への支援に参加する方を増やすための啓蒙活動を行う。 ・学校へ訪れて居場所カフェを開催する「出張ラボ」を輪島小、輪島中、東陽小中学校、門前学園、輪島高校に月1回を目安に開催。学校との連携や子ども・若者に関わるステークホルダーとの連携の実践の場として開催。また、地域住民向けに研修を開催し、専門職・専門職以外の地域ステークホルダーとのつながり連携を目指し活動している。	小学生：児童クラブを卒業する4年生の居場所（思いっきり遊べる場所）が不足している。走る、叫ぶ、飛ぶなど体を使って安心して遊べる場所が少ない。 中学校：学校の環境で安心できない生徒が増えている。そのため静かな場所で自分のペースで過ごせる場所や、学習支援など勉強ができる環境が必要。人間関係も変化が大きく起こる世代なので、個人でも利用できる環境が好ましい。 高校生：学業・部活・バイトなど多岐にわたる活動になってくるため、そのバランスを取ることが難しい世代。特に災害後の経済的不安からバイトをする生徒が増えているため、時間管理などに不安要素がある。	必要な支援がありつつも、あくまでも日常の自然な関わりや見守りを大切にしている。 その関係性の中から本人が抱えていることが見えてきたり、不安の吐露につながる。 小学生・中学生・高校生・若者と横断的につながり続けることができるので、時間が経過しても関係が切れにくい強みがある。
NPO法人外浦の未来をつくる会	村上 ゆり 日比 美友	murayuri@gmail.com	珠洲市大谷地区	NPO法人外浦の未来をつくる会は珠洲市大谷地区で、親子や幼児の居場所づくり、小中学校の放課後教室、地域の交流拠点「みんなの家」事業、関係人口創出などに取り組み、暮らす人も、訪れる人も笑顔になれる地域づくりを行っている。	震災から2年半が経過し、子どもたちは安定した生活を取り戻しつつあり、活動を通じて積極性も見られる。一方で地域の子どもの数は震災前の約2割に減少し、家庭や学校だけでは居場所が不足している。第三の居場所と斜めの関係性を長期的に築いていけるスタッフが子どもたちに必要だと感じている。	当会は地元住民を中心に地域との関係性を重視して運営されている。子どもに一方的なプログラムを与えるのではなく、やりたいことを引き出す形で活動を組み立てている。また移住者の若者スタッフが関わることで、子どもたちに新しい刺激や多様な価値観を提供している。

第1回 被災地の子どもの居場所づくり支援ネットワーク会議（R8.7.28）参加団体アンケート結果

所属 ※50音順※	氏名	メールアドレス	主な活動エリア	活動概要	活動地域におけるこどもたちの様子・ニーズとして考えていること	活動の強み
NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ	森谷 哲	moriya@musubie.org	能登地方、金沢地方、加賀地方	石川県のこども食堂ネットワーク団体と連携しながら、こども食堂MAPの配布と県内こども食堂の交流会の開催を予定している。		
かなざわっ子nikoniko倶楽部	喜成 清恵	nikonikokurabu.k@gmail.com	石川県内	こども食堂の運営・立ち上げ相談・ネットワーク化・フードバンク、困窮者支援、子育て支援	孤立した家庭・ひとり親家庭等の引きこもり支援、社会活動支援、学習支援、居場所づくりなど、家族以外の他人や社会に触れてる機会が必要だと思っております。	当団体の強みは、母体がNPO法人であること。法人の理事は、法律家などの専門職がいます。また、発達障害や引きこもり支援団体とも連携しているため、当団体のだけでなく他の子ども食堂活動を通じて困難な状況の家族を見つけたら、当事者と一緒に解決することを目指すことができるの事です。
公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン	山田 心健	munetake.yamada@savethechildren.org	七尾市、穴水町、能登町、珠洲市、輪島市	・七尾市、穴水町、能登町、珠洲市、輪島市に拠点を置くスポーツ・伝統文化活動への助成金 ・輪島市で子どもが意見交換できる機会提供 ・石川県内学童保育施設への防災支援および能登震災からの記録集作成	能登半島地震から2年以上が経つ中、子ども施設や通学路など子どもの生活に関わる基盤が未だ回復しておらず、遊びや学び、スポーツ・文化活動などの実施に影響がでている。 また、当会が実施した子育て世帯へのアンケート調査から、子ども自身の精神面での影響や災害に関連したストレスが大きく残っている。	地域で災害前から実施されていた活動を再開・継続できるよう、地域団体への助成金という形を取り側面からの支援に回っていること。また、地域で子ども支援をしている団体と連携し、現状に合わせた活動や継続性を意識していること。
こみっとのいえ	中田 真紀子	sg.m.nakada@gmail.com	七尾市（特に和倉、石崎、奥原町を中心）	活動開始に向け、行政・社協へ相談し、和倉で子ども食堂を行う方へも挨拶済み。人員や時間が重ならないよう協働し、将来的には主催を引き継ぐ予定。地域への周知を進め、コミュニティセンターや連合町会長にも挨拶済み。今後、先駆的な団体へ学びに伺う予定です。	震災から2年半が経ち、空き地の増加や人口減少により地域のつながりの弱まりを感じます。子ども食堂や学習支援を通じ、安心できる居場所を求める子どもが多く、重層的支援を要する家庭もあります。地域の大人との交流や温かな食事、学びの機会が自己肯定感を育み、孤立の予防や早期支援につながると感じています。	地域の魚屋の魚や近所から頂く新鮮な野菜を使った手料理で食育につなげられると思います。また、教員免許保持者や社会福祉士、管理栄養士、看護師など専門職がスタッフとして関わることで、子どもの心身への支援や課題に対して丁寧に寄り添い連携を取ることができます。
日本冒険遊び場づくり協会	関戸 博樹 川口 裕之	rockin.dockn1981@gmail.com kawaguchi@bouken-asobiba.jp	1回目はNOTOMORI 2回目は能登町の柳田公民館	2025年の2月と9月に「遊び場づくりでつながる能登半島ミーティング」を実施。能登に県外などから支援に来ている団体や、能登で活動を始めた地元団体の方々がつながり学び合う機会としました。	被災地支援としては子どもの遊び場づくりは重要だが、現地で活動を始めるプレイヤーが少ない状況があると聞いている。	子どもの遊び場や居場所づくりをする方々の後方支援（場づくりのノウハウ、人材育成など）
認定NPO法人CFFジャパン 市民活動団体 能登なかじまおいっさーズ	森野 和彬	morino.cff@gmail.com	七尾市/中島町西岸地区を中心	CFFジャパンとして、地震後継続的に支援活動に入り、地元団体をバックアップする形でこどもたちの居場所やあそび場など多様な体験機会の創出を行っています。	こどもたちが自らの居場所として選択肢があまりにも少ない。放課後、土日とも。また身近な環境から生きる力を育み、コミュニティや自らのレジリエンスなどを高める機会もなくなっている。里山里海の能登らしい暮らしが、そこに大きく寄与できるにも関わらず、その環境とこどもたちの生活が分離されがちで、接続する機会やシステムがなくなっている。	国際協力NPOとしたらこどものケアと青年育成をしてきたCFFジャパンがバックアップし、おいっさーズが地元メンバーとして、こどもたちの支援を始めて立ち上がっている構造に価値があると考えます。また、そのこども達との活動において、地域外からの青年達(大学生や社会人など)が共にいて、こどもたちにとって、斜め上の関係になれる能登地域には大変希少な交流と関係創出の機会となっていると思います。

第1回 被災地の子どもの居場所づくり支援ネットワーク会議（R8.7.28）参加団体アンケート結果

所属 ※50音順※	氏名	メールアドレス	主な活動エリア	活動概要	活動地域におけるこどもたちの様子・ニーズとして考えていること	活動の強み
避難者・被災者支援サポートボランティアひなさぼ	坂井 理笑	noto.fairy@gmail.com	奥能登 4 市町、石川県内、オンライン	facebookグループページ「奥能登こども情報」の運営など	妊娠、出産、産褥期の母子への支援。またご家族への支援。	メンバー同士の関係性を育てながら、それぞれの専門性や興味関心をもちよって、発災当時からオンラインでの定例ミーティングと、状況の変化に応じた活動を続けています。毎月17日はひなさぼの日として、オンライン会議や作業デーを開いています。誰もが意思決定できるフラットな組織体制が特徴です。
平和こども園	日吉 輝幸	capricorn64th@icloud.com	穴水町	園児と地域住民の交流	世代を超えた交流により、子どもは相手を労わる気持ちやコミュニケーション力が高まる。地域住民は、地域の子どもと関わる喜びを感じ、生きがいを感じている。	認定こども園がもつ機能を活用し、季節毎の行事や環境問題に関わる活動を取り入れるなど、地域住民にも学びを提供しつつ交流できる事。また昼食も提供できるので、食を通した交流もできる。
マリンタウン子ども会	垣内 大	d360on.nickonelove@gmail.com	輪島市マリンタウン	マリンタウン子ども会は、立ち上げ後すぐにコロナと地震の影響により、活動を停滞させていた。地震前は子どもの笹ギリコ行列やラジオ体操を実施しており、地震後に活動を再開させるためにラジオ体操、町内のゴミ拾い、お楽しみ会を実施、参加者を拡げるために小学生卒業学年にジュニアリーダーに任命した。主な対象者は地域の小中学生	子どもは順応力があるといわれており、確かに被災後の輪島を受け止めてイベント等で楽しむ姿も見られるが、余裕の無い大人を見て視野の狭さの感覚を自然と共有しているように感じます。これまでは学校でのコミュニティ・家庭でのコミュニティ・地域でのコミュニティが個別で大小あるものの有ったように思います。学校でも家庭でも状況が変わり支えられる容量が少なくなってきた中で地域での活動が子どもを支えるために必要だと感じます。	活動の強みとしては地域に住む者が主な活動者と直結することであり、活動することが地域の経験値や生活につながる。地域のコミュニティ活動であるが、子どもを中心とした活動の目的があるため大人が活動する理由にもつなげやすい。専門性は、特化したものはないが会員は多様な職業に就いている。
三崎町第二団地保護者の会	千布 智秋		珠洲市三崎町	珠洲市三崎町や仮設住宅に住む子ども達を対象に、居場所づくりをする活動を行っています。	外でのびのびと遊べる場所が減っています。行政には空いている公共施設の利用など、融通を効かせて頂きたいと感じています。	三崎公民館と連携した活動で地域の人たちが子ども達の顔を覚えてくれている安心感や、外部の子ども支援専門NPO団体と連携しているため、さまざまな状況の子どもに対応可能です。
三道山子ども食堂	田中 策次郎	sandouyama@nomi-city.net	珠洲市全域	珠洲市内仮設住宅と公民館などへの居場所づくり支援	珠洲市内には児童生徒数が少なく、子ども同士の交流の場が少ないため、大人が作る子どもの居場所に加え、子ども同士が考え自由に交流できる機会が必要と考える。遊び場はもちろんスポーツや文化活動など多様な選択肢があると良いと考える。	発災直後から避難所支援を行っており、地元の方とのつながりは大きい、現在も炊出しや訪問を重ね現地支援130回を行っている。
ヤングケアラープロジェクトいしかわ	青木 和美	ishi.youngcarer@gmail.com	金沢市と県内周辺市町	対象者：ヤングケアラーと、概ね30代までの若者ケアラー。活動内容：気持ちが楽に過ごせる場として、「いばしょカフェ」に力を入れています。その他、啓発活動や講演会、研修会の依頼にも応じています。情報発信にも努め、関係団体との連携を図りながら必要とされる団体を目指しています。	当事者との接触をなかなか持てないのが課題ですが、対象となる子供や若者だけでなく、家族を含めての支援が必要と考えています。学校現場や子ども食堂等との繋がりから対象者との接触がより可能になるものと思われますが、連携を取れるところまでは行きついていません。	ヤングケアラー当事者から研究者になった会員を含め、公認心理士の資格を持つ会員、介護の知識と現場を知っている会員の存在、市議として問題意識を共有する会員等、人数は少ないですが多岐に亘る活動実績や思いを持った会員で団体を形成しています。月に一度の定例会の開催で、情報や思いを共有しながら活動を進めています。